

自分の思いや考えを伝え合うことができるこどもを育成する外国語科の授業づくり

— 小学校外国語科における目標・指導・評価をつなぐ3つの方法の提案を通して（1年計画） —

〈外国語教育研究グループ〉

高橋 芳徳¹、加藤 良典²、高橋 幸恵³、阿部 真弓⁴、齋藤 弘美⁵、渡邊 隆仁⁵、高橋 裕之⁵
 名取市立第二中学校¹、大崎市立三本木小学校²、登米市立佐沼小学校³、宮城県古川黎明高等学校⁴、
 宮城県総合教育センター⁵

【要約】本研究では、目標・指導・評価をつなげて授業づくりを行うために、「目標を具体化し指導と評価の計画を立てる方法」「評価を指導につなげる方法」「評価から指導を振り返る方法」の3つの方法を提案し、小学校で授業実践を行った。教員が単元の指導に見通しを持ち、学習状況に応じて指導や支援の充実を図ったことで、児童は自らの学習を調整し、単元の目標に到達することができた。英語で自分の思いや考えを伝え合う児童の姿が見られたとともに、児童自身も伝え合うことができたという達成感を持った。

【キーワード】指導と評価、評価事例、評価の判断基準、指導の改善、CAN-DOリスト

1 はじめに

令和2年度より小学校学習指導要領（平成29年告示）が全面実施され、小学校高学年では外国語科が導入された。慣れ親しみの段階から、更に知識及び技能の習得が求められるようになり、「何ができるようになるか」という資質・能力の育成を目指した指導の中で、児童に「何が身に付いたか」という評価が極めて重要になったと言える。

みやぎの英語教育推進計画（令和2年）では、目指す児童生徒像の1つとして、「英語を用いて自分の思いや考えを伝え合うことができるみやぎのこども」を掲げており、小・中・高等学校共通の取組として、『身に付けたい力』を明確にした単元づくりを挙げている。

本研究で行った県内の小学校教員への意識調査の結果を見ると、外国語科の授業づくりで困っていることとして評価が多く挙がっており、目標に照らした評価の判断基準や評価を行う場面を適切に設定することに不安を感じている様子が見受けられる。このことから、目指す児童の姿を具体的にイメージして目標を設定すること、目標の実現に向けて指導と評価が一体となった授業を組み立てることに課題があるのではないかと考えた。

そこで、本研究では、目標・指導・評価をつなげて授業づくりを行うため、①目標を具体化し指導と評価の計画を立てる方法、②評価を指導につなげる方法、③評価から指導を振り返る方法を提案する。

目標を具体化し指導と評価の計画を立てる方法とは、単元の目標を達成するために、単元の終末における目指す児童の姿から逆算して（バックワード・デザイン）単元を組み立てることである。これにより、単元の目標に向けて、1単位時間ごとに指導すべきことや学習状況を確認する場面を明確にするこ

とができる。また、児童と学習目標を共有することで、単元の最終に行う言語活動に向けて、主体的な学びを促すことができる。

評価を指導につなげる方法とは、目標に照らした学級全体や個の学習状況に応じて、必要な指導や支援の手立てを講じることである。これにより、即時的に指導の改善を図ったり、児童が学習を調整したりすることができる。

評価から指導を振り返る方法とは、評価の結果から、指導について有効だった点や改善を要する点を振り返り、次の単元に生かす取組を行うことである。複数の教員で単元の指導を検討し課題を共有することで、より児童の実態を踏まえた単元づくりを行っていくことができる。

以上の3つの方法を用いることで、自分の思いや考えを伝え合うことができるこどもの育成を目指す。

2 開発研究

(1) 目標を具体化し指導と評価の計画を立てる方法

① 「計画作成ガイド」

「計画作成ガイド」は、「CAN-DOリスト」の形で設定した学習到達目標（以下「CAN-DOリスト」）を基に、年間指導計画を立て、それに沿って単元の指導と評価の計画を立てられるようにするものである。計画を立てる過程では、児童の実態や教科書の内容を踏まえて、学習到達目標を単元の目標として具体化していく。これらの計画を教員が各学校の実態に応じて作成できるようにするため、作成例とその手順等を示した。

「CAN-DOリスト」には、五つの領域の学習到達目標を学年ごとに示すことで、修了及び卒業の時点で児童に身に付けさせたい力を明確にした。

年間指導計画には、「CAN-DOリスト」や教科

書の内容を基に、記録に残す評価*1を行う領域を各単元に割り振って示すことで、年間を見通して、五つの領域をバランス良く指導し、評価することができるようにした。

単元の指導と評価の計画では、記録に残す評価に至るまでの指導に見通しを持てるようにするため、評価する領域を明確にした本時の評価規準を示した。このように示したことで、1単位時間ごとに、どの領域、どの言語活動で学習状況を確認すれば良いかが分かる。さらに、児童と学習目標を共有し、学習の見通しを持たせて主体的な学びを促すために、「学習カード」の形式を検討し活用を図った。

② 「評価事例集」

「評価事例集」は、単元の目標を具体化し、判断基準を明確にして評価ができるようにするものである。思考力、判断力、表現力等を働かせる言語活動例と記録に残す評価の判断基準、評価例を示すことで、目指す児童の姿を具体的にイメージできるようにした。これにより、目標に照らして、1単位時間ごとに学習状況を確認したり、記録に残す評価を行ったりすることができる（図1）。

思考・判断・表現の判断基準

A：十分満足できる状況	「B」に加えて、練習の語句や表現を用いて、自分の考えや気持ちが更に詳しく伝わるように話している。
B：おおむね満足できる状況	夏休みの思い出について、行った場所やしたこと（楽しんだこと、食べた物など）、感想を話している。
C：努力を要する状況	「B」を満たしていない。

評価例（S＝児童、T＝教員）

Aとなる例	Bとなる例	Cとなる例
S: I went to Hanayama. I enjoyed hiking. Do you like hiking? I ate a rice ball. I like rice balls. It was fun. 理由 夏休みの思い出について、行った場所やしたこと（楽しんだこと、食べた物）、感想を話しているだけでなく、①Do you like hiking?と相手の理解を確かめる呼び掛けを行った。②I like a rice ballと情報を付け足したりして、自分の考えや気持ちが更に詳しく伝わるように話している。 練習の語句や表現の活用としては、一文を付け足すだけでなく、by car や with my family のように文の後ろに語句で付け足すことも考えられる。	S: I went to Hanayama. I enjoyed hiking. I ate a rice ball. It was fun. 理由 夏休みの思い出について、行った場所やしたこと（楽しんだこと、食べた物）は話しているが、感想を話していない。そのため、どのような夏休みを過ごしたのかが十分に伝わらない。	S: I went to Hanayama. I enjoyed hiking. I ate a rice ball. ... T: 感想はありますか？ S: It was... 理由 「C：努力を要する状況」と判断した児童に対する指導や支援については、「指導・支援アイデア集」を参照

図1 評価事例集（一部抜粋）

(2) 評価を指導につなげる方法

「指導・支援アイデア集」

「指導・支援アイデア集」は、単元の指導の中で、学習状況を確認し、必要な指導や支援を行えるようにするものである。支援を必要とする児童の姿を4技能に分けて示すことで、それに応じた具体的な指導や支援が分かるようにした。授業を行う前に「指導・支援アイデア集」に目を通すことで、どのような指導や支援を行うかを事前に想定することもできる（図2、図3）。

話すこと 5 話す内容が思い浮かばない

全 ... 学級全体に対する指導や支援 個 ... 個人に対する指導や支援

話す内容のイメージが持てない場合

①様々な例を聞かせ、「自分だったら何を言うか」を考えさせる。全

どのようなことを話せば良いかイメージが持てないために、自分のことを話さないことが考えられる。Small Talkなどを活用して教員やALT、他の児童が話す姿を見せ、同じ話題でも様々な話ができることに気付かせる。様々な例を聞くことが、「自分だったら何を言うか」を選んだり、考えたりする際の材料の1つになる。

②友達と繰り返し対話する活動を設定し、イメージを広げる。全

語句や表現に慣れ親しむ段階で、歌やチャンツだけでなく、「夏休みに行った場所が同じ友達を見付けよう」などの課題を設定し、児童同士が対話する活動を取り入れる。児童は、たかさんの友達と“I went ~.”を使って対話をする中で、表現に慣れ親しむとともに、様々な場所のことを話せることに気付くことができる。

図2 指導・支援アイデア集「話すこと5」（一部抜粋）

聞くこと 1 音声教材、教員が話す英語を聞き取れていない。

全 ... 学級全体に対する指導や支援 個 ... 個人に対する指導や支援

話す速さや聞かせる量などが児童に合っていない場合

①話す速さを変える。全

音声教材ではなく、教員やALTがスクリプトをゆっくりはっきり読み、聞き取らせたい語句や表現を強調して読み、聞かせ方を工夫する。

図3 指導・支援アイデア集「聞くこと1」（一部抜粋）

(3) 評価から指導を振り返る方法

「単元の指導振り返りシート」

「単元の指導振り返りシート」は、記録に残す評価の結果や児童の様子、指導を振り返るチェック項目から、指導について有効だった点や改善を要する点を話し合い、次の単元に生かしていくものである。複数の教員で指導を検討することで、より児童の実態を踏まえた単元づくりを行うことができるようにした（図4）。

単元の指導振り返りシート

()年()組 単元名()

担任() 副担任()

1. 単元の指導振り返りシート

2. チェックリスト

項目	内容	評価
① 言語活動	単元の目標の達成状況、コミュニケーションの目的や場面、状況が明確で、児童の参加意欲が持続しているか。	1 2 3 4
② 時間配分	児童が、発音、表現の学習を完了する時間配分が適切であるか。	1 2 3 4
③ 目標の共有	児童が単元の目標を共有し、達成するための学習活動に取り組んでいるか。	1 2 3 4
④ 学習状況の確認	児童の学習状況を把握し、必要に応じて指導や支援を行っているか。	1 2 3 4
⑤ 指導や支援	児童の学習状況を把握し、必要に応じて指導や支援を行っているか。	1 2 3 4
⑥ 評価の振り返り	単元の目標達成状況を振り返り、指導や支援の効果を評価しているか。	1 2 3 4
⑦ 評価	単元の目標達成状況を振り返り、指導や支援の効果を評価しているか。	1 2 3 4
⑧ T T	単元の目標達成状況を振り返り、指導や支援の効果を評価しているか。	1 2 3 4

3. 単元の指導振り返りシート

4. チェックリスト

5. 次の単元の指導について考える

図4 単元の指導振り返りシート

3 実践研究

(1) 実践の概要

研究協力校2校において、本研究で提案する3つの方法を用いて授業実践を行った。使用教材は、東京書籍発行のNew Horizon Elementary 5(第5学年)、New Horizon Elementary 6(第6学年)である。実践した単元と内容は以下のとおりである(表1、2)。

表1 研究協力校において実践した単元

	A校 (第5学年、第6学年)	B校 (第5学年)
I期	5年 Unit 2 When is your birthday? 6年 Unit 2 How is your school life?	
II期	5年 Unit 4 He can bake bread well. 6年 Unit 4 Summer Vacations in the World	

表2 実践内容と使用した研究成果物

事前	研究員と研究協力校の教員が協働して単元の指導と評価の計画を作成し、評価の判断基準を設定した。 「計画作成ガイド」「評価事例集」
単元の指導	1時間目 研究員が授業を行い、児童と単元の目標を共有した。 「学習カード」

	2～5 時間目	研究協力校の教員が単元の指導と評価の計画に基づいて、学習状況を確認しながら指導や支援を行った。5時間目には、評価の判断基準を表にまとめて示し、デモンストレーションで具体を見せることで、児童と共有した。 「指導・支援アイデア集」
	6～7 時間目 (記録に残す評価)	研究員と研究協力校の教員が評価の判断基準を基に、記録に残す評価を行った。 「評価事例集」
事後	研究員と研究協力校の教員が協働して単元の指導を振り返り、次の単元の指導と評価の計画を立てた。 「単元の指導振り返りシート」	

① 目標を具体化し指導と評価の計画を立てる方法

単元の指導の前に、「計画作成ガイド」と「評価事例集」を示し、研究員と研究協力校の教員が協働して単元の指導と評価の計画を作成した。児童の実態に関する情報を共有し、単元の最終に行う言語活動や児童の発話例を検討した。目指す児童の姿を具体的にイメージしながら、最終の言語活動に向けて1単位時間ごとに指導すべきことを確認した。

単元の指導では、1時間目は研究員が授業を行い、児童と単元の目標を共有した。最終の言語活動を示し、「学習カード」を用いて児童に学習の見通しを持たせるようにした。児童は、「友達に紹介するときすらすら言えるようにいっぱい練習したい」「夏休みに行った場所や感想を言えるようになりたい」「場所の言い方をもっと知って夏休みの思い出を紹介できるようにしたい」など、単元の最終の言語活動に向けて見通しや意欲を持ったことを「学習カード」に記述していた。

② 評価を指導につなげる方法

2～5時間目は、単元の指導と評価の計画を基に研究協力校の教員が指導を行った。「学習カード」を用いて、その時間に何ができるようになれば良いかを本時のめあてとして児童と共有した。これにより、自分から教員に英語の言い方を尋ね、繰り返し会話を練習する児童の姿が見られた。また、児童が本時の目標に到達しているか、支援を必要とする児童はいないかなど学習状況を確認し、「指導・支援アイデア集」を参考にしながら、必要に応じて活動や発問・指示の出し方の工夫や個別の支援を行った。最終の言語活動を行う前には、評価の判断基準を分かりやすく表にまとめて示し、デモンストレーションで具体を見せることで、児童と評価の判断基準を共有した。

6～7時間目には、「評価事例集」の評価の判断基

準を基に、研究員と研究協力校の教員が児童の言語活動の様子を見て、記録に残す評価を行った。

③ 評価から指導を振り返る方法

単元の指導の終了後には、「単元の指導振り返りシート」を用いて、研究協力校の教員が指導の振り返りを行った。また、研究員とともに、指導について有効だった点や改善を要する点などを話し合い、次の単元の指導と評価の計画を立てた。

(2) 実践の検証

① 学年ごとの評価の結果

評価の結果から、研究協力校の教員が「十分満足できる」「おおむね満足できる」状況と判断した児童の割合を見ると、第5学年では、Ⅰ期実践で、全ての観点において80%以上だった。Ⅱ期実践では、知識・技能が84.7%、その他の観点では90%以上だった(図5)。第6学年では、いずれの観点においても、Ⅰ期実践で85%以上、Ⅱ期実践は95%以上だった(図6)。第5学年、第6学年ともに、Ⅱ期実践では、いずれの観点においても、「努力を要する」状況と判断した児童の割合がⅠ期実践よりも減少し、多くの児童が単元の目標に到達した。

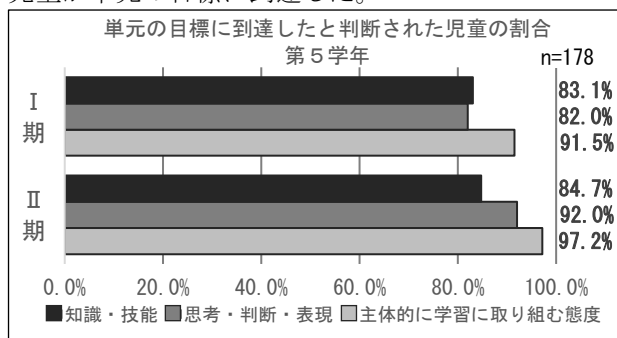


図5 研究協力校の教員による評価の結果（第5学年）

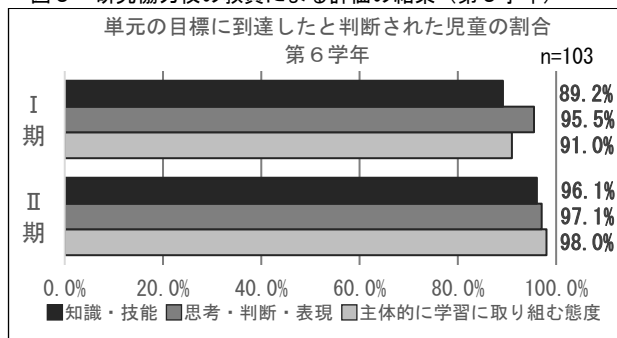


図6 研究協力校の教員による評価の結果（第6学年）

② 児童の意識調査の結果

児童の意識調査の結果を見ると、「友達に夏休みの思い出や身近な人を紹介することができましたか」という問いに対し、肯定的に回答した児童が90.8%だった。(図7) また、「友達の話聞いて夏休みの思い出や身近な人のことが分かりましたか」という問いに対し、肯定的に回答した児童が92.2%だった(図8)。多くの児童が、英語で自分の思いや考えを伝え合うことができたと感じていることを示している。さらに、「紹介できるようになるために何を頑張りましたか」という問いに対し、「友達と練習をする」

「先生の手本を見る」「英語を何回も聞く」などと回答した児童が96.8%だった(図9)。多くの児童が、目標に向けて自らの学習を調整していることを示している。

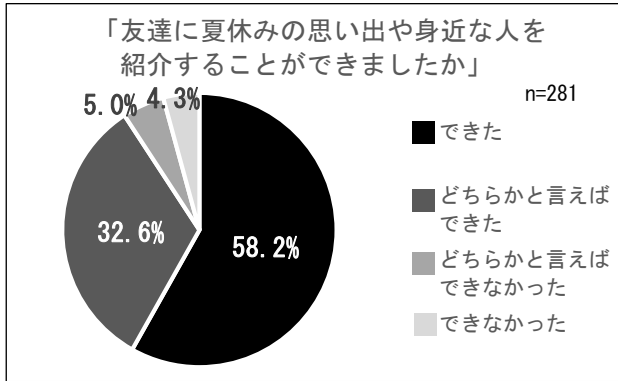


図7 II期実践後の児童の意識調査の結果（話す）

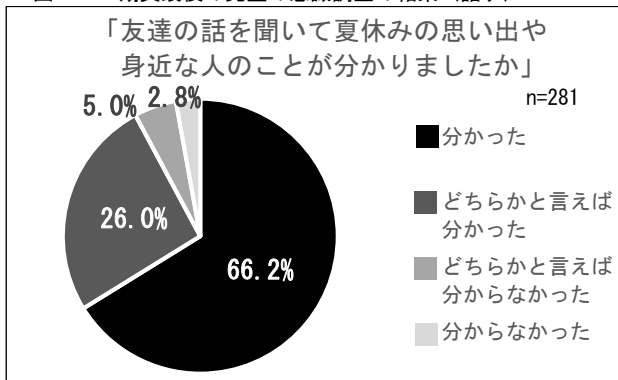


図8 II期実践後の児童の意識調査の結果（聞く）

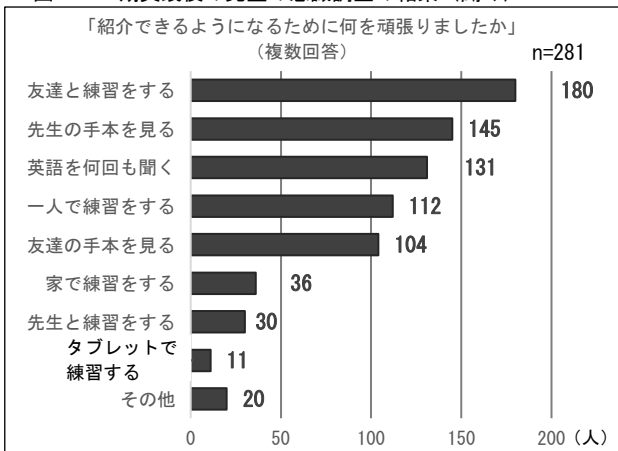


図9 II期実践後の児童の意識調査の結果（学習の調整）

③ 教員への聞き取り調査の結果

ア 抽出児童の変容

I期実践とII期実践を比較し、向上が見られた児童の中から23名を抽出し、評価の結果や授業動画、教員への聞き取り調査や「学習カード」から分析を行った。

児童の様子について授業動画を分析した結果、I期実践では、一文ずつ思い出しながら話している様子や発音や表現に不安がある様子が見られた。一方、II期実践では、伝えたい内容を整理した上で話し、夏休みの思い出や身近な人について伝えるために、自分で描いた絵を指し示しながら、詳しく紹介する様子が見られた。また、よりよい発表を目指し、既

習事項を活用して、自分の気持ちを伝えている児童もいた。

教員への聞き取り調査から児童が向上した要因を分析した結果、「学習に粘り強く取り組んだ」ことや「教員が個別の支援や声掛けを十分に行った」ことが向上した主な要因だと分かった(図10)。友達と繰り返し会話を練習したり、分からないところがあればすぐに教員や友達に質問をしたりした児童が多かった。

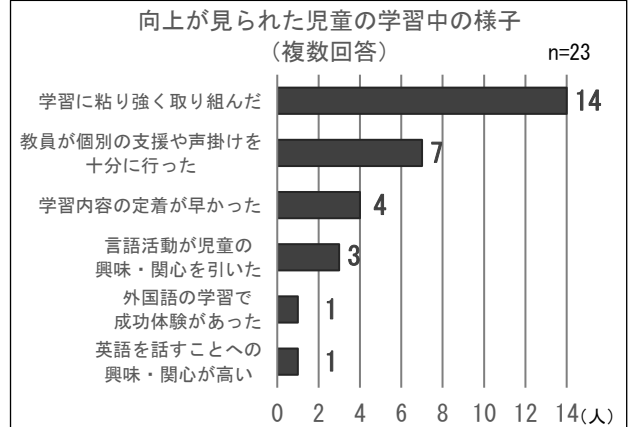


図10 向上した要因の聞き取り調査の結果

また、「学習カード」の「heやsheの区別やcanやcan'tの違いなどを言ったり聞いたりして頑張った」「分からない英語を友達に教えてもらって、その英語を覚えるまで練習した」という記述から、児童が自らの学習を調整している様子が見られた。

I期実践とII期実践を比較して、向上が見られなかった児童の中から6名を抽出し、授業動画の分析を行った。やり取りに慣れておらず質問されたことに何と答えれば良いか分からなくなっている様子や、伝えたいことと表現が一致していない様子が見られた。このような児童の実態に応じて、多様な支援ができるように「指導・支援アイデア集」をより充実させていく必要がある。

イ 教員の変容

表3 研究協力校の教員の感想

- 児童の実態を踏まえて、教科書にある活動アレンジしたり、オリジナルの活動を取り入れたりして、語句や表現を身に付けさせるようにした。単元の目標に向けて、本時の目標や活動を計画することができた。
- 「評価事例集」を見て、単元の最終の言語活動で児童が何をどう話せば良いかが分かった。ALTとデモンストレーションを行う際にも、児童がどこまでできているかに合わせて、重点を置くポイントを変えた。
- 単元の指導と評価の計画を基に1時間ごとの学習状況を見取ることを意識した。ALTと分担し学級全体の傾向を見取ることができた。
- 見取った学習状況に応じて指示や説明、活動の順番、活動形態等を変更しながら指導した。

- 「学習カード」で単元の学習の見通しを児童と共有し、最終の言語活動に向けて全体や個への言葉掛けを継続して行った。児童は、その時間に何をすれば良いのか常に意識していた。児童が自主的に練習に取り組んだので、称賛や励ましをしたところ、ますます頑張る様子が見られた。
- これまでは思考・判断・表現の評価の仕方や判断基準がよく分からなかったが、「評価事例集」に判断基準の具体例があったので参考になった。学年で判断基準を統一し、言語活動の様子を見て評価を行うことができた。
- 語句や表現の定着に時間が掛かったという課題を次の単元に生かし、ゲーム的活動を取り入れ語句や表現に慣れ親しませるようにした。

教員が見通しを持って単元の指導を行い、学習状況を確認して指導や支援を工夫していた。また、判断基準を明確にして評価を行い、次の単元の指導に生かしていた（表3）。

4 おわりに

(1) 研究の成果

研究協力校の教員による評価の結果や児童の意識調査の結果から、自分の思いや考えを伝え合うことができるこどもを育成することができたことが分かった。

教員は、児童の実態を踏まえた計画を立て、目指す児童の姿を具体的にイメージしながら指導し、学習状況を確認して、必要に応じて指導や支援を工夫した。つまり、目標・指導・評価をつなげて授業づくりを行うことができたと言える。これにより、児童は自らの学習を調整し、多くの児童が単元の目標に到達して、自分の思いや考えを伝え合う姿につながったと考える。

目標・指導・評価をつなげて授業づくりを行う上で、3つの方法が有効であったと考える。

① 目標を具体化し指導と評価の計画を立てる方法

教員が見通しを持って単元の指導を行った様子から、目標・指導・評価をつなげて単元の指導と評価の計画を立てられたことが分かる。「計画作成ガイド」で単元の指導と評価の計画の作成例と作成手順を示したことで、単元の目標に向けて、1単位時間ごとに指導すべきことや評価する場面を明確にすることができた。

また、教員が学習状況の確認や明確な判断基準を持って記録に残す評価を行った様子から、目指す児童の姿を具体的にイメージできたことが分かる。「評価事例集」で評価の判断基準や評価例を示したことが有効であった。

さらに、児童が学習に粘り強く取り組んでいた様

子から、「学習カード」を用いて児童と学習目標を共有したことは、児童が見通しを持って主体的に学習に取り組むことにつながった。

② 評価を指導につなげる方法

教員が学習状況に応じて指導や支援を工夫した様子から、「指導・支援アイデア集」が有効であったと考える。支援を必要とする児童の姿や具体的な指導や支援の例を示したことで、授業をする際の参考になったと考えられる。また、教員が、学習状況の確認を意識的に行い、全体や個への言葉掛けを継続したことは、児童が目標に向けて粘り強く取り組み、自らの学習を調整することにつながったと考える。

③ 評価から指導を振り返る方法

教員が単元の指導を改善し次の単元に生かしている様子から、「単元の指導振り返りシート」が有効であった。指導を振り返るチェック項目や話合いの流れを示したことで、改善を要する点が明らかになり、次の単元づくりに生かすことができた。

(2) 今後の展望

研究員が年間を通して授業を行い、3つの方法の有効性をより明らかにしていくことが必要である。小学校、中学校及び高等学校それぞれの所属校で、3つの方法を活用し、目標・指導・評価をつなげた授業づくりを実践していきたい。

「努力を要する」状況と判断された児童や自分の思いや考えを伝え合うことができたと感じるまでに至っていない児童もおり、児童の学習状況は多岐にわたる。授業実践を通して、より効果的な指導や支援を探り、「指導・支援アイデア集」の充実を図りたい。

研究協力校の教員に授業実践を通して3つの方法を活用した授業づくりについて伝えることができたが、外国語科の指導に関わる教員に限られた。本研究で開発した成果物を教員に広く活用してもらえよう、普及を図りたい。

【注】

*1 記録に残す評価とは、児童全員の学習状況を記録に残し、評価の総括の資料とするものである。

【引用・参考文献】

- 1) 文部科学省：「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」, 2017
- 2) 国立教育政策研究所教育課程研究センター：『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」小学校外国語・外国語活動, 2020
- 3) みやぎの英語教育推進委員会：「みやぎの英語教育推進計画」, 2020

【図表等の許諾について】

図5・図6は、実践の中で、研究協力校の教員による評価の結果である。図7・図8・図9は、実践後に行った児童の意識調査の一部である。図10・表3は、実践後に行った教員の聞き取り調査の一部である。研究の目的にのみ使用することとし、研究協力校から使用許諾を得た。

自分の思いや考えを伝え合うことができるこどもを育成する外国語科の授業づくり —小学校外国語科における目標・指導・評価をつなぐ3つの方法の提案を通して（1年計画）—

外国語教育の動向
小学校に外国語科が導入され、習得が求められるようになった。

本研究で行った教員の意識調査
言語活動の評価について困っている、詳しく知りたい。

研究目標

小学校外国語科において、自分の思いや考えを伝え合うことができるこどもを育成する授業づくりを行うために、目標・指導・評価をつなぐ方法を考案し、実践を通してその有効性を明らかにする。



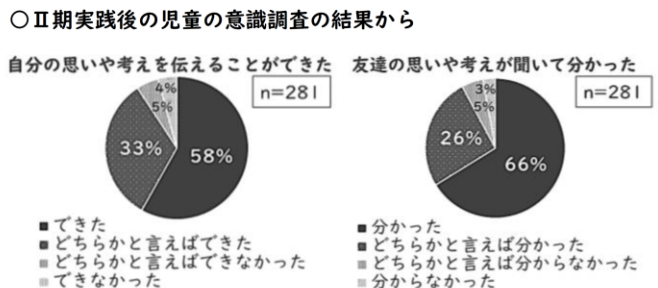
研究構想・開発研究
4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月
11月
12月
1月
2月
3月

I 期実践
修正
II 期実践
研究の検証・考察・まとめ
出前授業

検証

○II期実践後の評価の結果から
単元の目標に対して「十分満足できる」「おおむね満足できる」状況と判断された児童の割合

観点	第5学年	第6学年
知識・技能	84.7%	96.1%
思考・判断・表現	92.0%	97.1%
主体的に学習に取り組む態度	97.2%	98.0%



○教員への聞き取り調査の結果から
「児童は学習に粘り強く取り組んでいた」
「個別の指導や支援を行うことができた」
⇒学習状況に応じて指導や支援を工夫することができた。 ⇒自分の思いや考えを伝え合うことができたという達成感につながった。